お伽草子

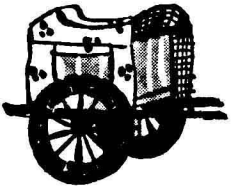
福田清人

ジュニア版・日本の古典文学

お伽草子

福田清人

東京都新宿区戸塚町1の647
早稲田大学語学教育研究所



ジュニア版・日本の古典文学……11

お　伽　草　子

N・D・C 918　偕成社 238p.　20cm　1974年

1974年9月発行

編著者　福田清人

発行者　今村　広

発行所　株式会社　偕成社
東京都新宿区市谷砂土原町3の5
電話　東京（260）3221　〒162
振替　東京 1352

印刷所　壮光舎印刷株式会社
東京都荒川区東日暮里6-20-9

乱丁本・落丁本はおとりかえいたします。

8393－807110－0904

©福田清人　1974年
printed in Japan

●はじめに

福田清人

『お伽草子』は、いまから二百五十年ほど前に編まれた本で、二十三編の説話が収められています。この本では、その中から九編、他から二編を選んで収めました。有名な「浦島太郎」や「一寸法師」「酒呑童子」「鉢かずき」など、みんな『お伽草子』にある物語で、わたしたちは、幼い時、祖父母や両親からこの話を聞かされて、たいへん面白かった印象が、いまでも頭に残っています。

これらの話は、南北朝時代から江戸時代の初期まで（一三五〇～一六五〇年）、約三百年のあいだに、たくさん生まれたもので、その数は三百を越えるだろうといわれます。歴史的に見てこの時代は、日本のたいへん不幸な時でした。戦乱や飢饉がつづき、都は焼け野原となり、山賊や盗賊が横行し、人びとは家を焼かれ、財産をうばわれ、明日の命も知れない不安な気持ちで過しました。こういう時代に生まれた説話ですから、もちろん作者もわかりません。ただ読んで、一般の人びとからよろこばれ、女や子どもにもたのしめるというのがその特色で、それらの説話をひっくるめて、お伽草子と呼びました。

この本には、とくにその代表的な、興味ぶかいものをえらんで収めました。

目次

鉢かずき姫……6
ひとり娘……6
嫁くらべ……13
唐糸そうし……31
石牢に閉じこめられる……31
舞いのほうび……46
木幡ぎつね……55
若君誕生……55
犬がこわい……63

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

ものぐさ太郎……69
都へのぼる……69
辻取り……80
はまぐりのそうし……94
貧しい母と子……94
ふしぎな天女……101
梵天国……110
美しい姫……110
天子さまの難題……119
猫のそうし……137
猫を放ち飼いにせよ……137
利口なねずみ……146

一寸法師……150
浦島太郎……158
酒呑童子……165
さらわれた姫たち……165
生き血をすう鬼ども……174
七夕……189
父親は鬼……189
あけてはならない箱……194
俵藤太……210
蛇と美女……210
むかで退治……215
解説……232

お伽草子

鉢かずき姫

ひとり娘

むかし、河内の国（今の大阪府）の交野というところに、備中守さねかたという人が住んでおりました。みごとな宝物やお金をたくさん持っているうえに、詩や歌を作ったり、音楽をかなでることがじょうずでした。そして、のどかな空を眺めては、たのしい月日を送っておりました。その奥方もまた、①万葉・②古今などの歌集や小説などを読むのがたのしみで、花や月をめでて暮らすという、心のやさしいお方でした。そのうえ、夫婦の仲は、いたってむつまじく、なにひとつ不足なものはありませんでした。

ところが、この夫婦にたったひとつだけ、悲しいことがありました。それは、子どものいないことです。それで、夫婦は朝夕、[3]長谷の観音さまに参詣して、

「どうか子どもを、おさずけくださいませ。」

と、熱心に祈りつづけました。その願いがとどいたのでしょうか、ある年、かわいらしい女の子が生まれました。

夫婦のよろこびは、ひととおりではありません。

さっそく、長谷の観音さまにお礼まいりをして、お姫さまのこれからの幸福をお祈りしました。

この姫が、すくすくとそだって、ちょうど、十三になった年のことです。

お母さまは、ふとしたかぜがもとで、寝こんでしまいました。二、三日たてばなおるだろうと思っておりましたが、日ましに悪くなるばかりです。お父さまと姫とは、枕もとにつきっきりで看病しましたが、そのかいもなく、いよいよ、あすまではむずかしいという、容態になりました。その晩、お母さまは姫を枕もとに呼びよせると、やせた手で姫の髪の毛をなでながら、

「かわいそうにね。もうすこし長生きして、あなたの髪に花嫁のかざりをつけるところを見たかったのに。こんな小さいあなたを残してゆくなんて、ほんとうに心のこりで……。」

といって、涙をぽろぽろこぼすのでした。姫も悲しくなって、いっしょに泣きだしました。お母さま

は、なにを思ったのでしょう。泣く泣く、そばにあったうるしぬりの、ずっしりと重い手箱を、姫のふさふさした黒い髪の毛の上にのせて、その上にまた、肩まですっぽりかくれるほどの大きな鉢を、かぶせて、

「これは、わたしの信仰する観音さまのおいいつけのとおりにしたのです。観音さま、どうか、姫をお守りくださいませ。」

と、つぶやきながら、目をつむると、そのまま死んでしまいました。姫は、お母さまのからだにすがりつき、泣きくずれるばかりです。父も、たいそうおどろき、

「こんなにかわいい、おさない姫をひとり残して、死んでしまうなんて、これからさき、わたしはどうすればよいのだろう。」

と、嘆き悲しみましたが、もはや、どうすることもできませんでした。おとむらいがすんでのち、父は姫の頭の上に、うっとうしそうにのっている鉢を見て、とってやろうとしましたが、どうしたことか、鉢は頭にぴったりとすいついたようになって、どんなにしてもとれません。父は、びっくりして、

「これはどうしたことじゃ。お母さまに死なれてしまったうえ、こんなかたわ者になるなんて、なんとかわいそうなことをしたろう。」

と、ひどく悲しむのでした。こうして月日もたちました。親類の人やお友だちは、嘆き悲しんでばか

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

りいるさねかたを見かねて、新しい奥方(1)でももらったら、すこしはさびしさも忘れられるだろう、とすすめました。そこで、さねかたは二度めの夫人をむかえることになりました。

そして、さねかたは新しい奥方に、いくらか気をとりなおしましたが、姫は、いつまでも亡くなった母のことを思い出しては、悲しんでおりました。

新しい母は、姫を見るたびに、

「この子は、なんとふしぎなかたわ者だろうね。鉢をかぶったかたわ者なんか、みっともなくて、わたしの娘だなどといえないよ。」

と、つめたくいうのです。

やがて、新しい母に、女の赤ちゃんが生まれました。そうなると、ますます、鉢かずき姫をじゃまにして、にくらしく思うようになり、ありもしないことを、父に告げ口するようになりました。

姫は悲しくて、毎日、泣いてばかりいました。ある日、亡くなった母のお墓へおまいりして、

「お母さま、お母さまが亡くなってから悲しくてたまりませんのに、こんな鉢が頭にくっついているかたわの姿では、二度めのお母さまが、おにくみになるのも、もっともだと思います。もう、生きているかいもありません。どうぞ、お母さまのいらっしゃる国へ、わたしをつれて行ってください。」

と、涙を流してうったえました。

二度めの母は、鉢かずきが毎日お墓まいりすることを知ると、たいそうにくらしく思い、父に申しました。

「まあ、鉢かずきは、恐ろしい娘です。母上のお墓におまいりしては、お父さまをはじめ、わたしやまだ小さい妹まで殺すつもりで、のろいをかけておるのでございますよ。」

父は、それをすっかりほんとうに思って、たいそうおこり、姫を呼びつけると、

「おまえは、あわれなかたわ者だと思って、かわいそうに思っていたのに、罪もないお母さまや妹までをのろうとは、なにごとです。そのようなわからずやは、もう、この家におくことはできない。さっさと、この家から出て行きなさい。」

と、いいました。そばで聞いていたまま母は、たくらみのわなにかかったことを、うれしそうに、横をむいてつめたく笑っていました。

「かわいそうだけれど、お父さまのきついおいいつけだから。」

といって、鉢かずき姫をひきよせると、着ていた着物をむりにぬがせて、よごれた、ひとえものの着物一枚だけを着せました。そして遠い野原につれて行き、そこに置きざりにして、帰ってきました。

姫は、悲しみ泣きくれておりましたが、どうにもしかたがありません。どこへ行くというあてもなく、涙ながらにさまよい歩いて行くと、大きな川のほとりに出ました。姫は、じっと川の流れを見ていま

したが、
「そうだ。いっそのこと、この川に身を投げて、お母さまのいらっしゃる遠い国へ行ってしまおう。」
と決心すると、身をおどらせて、川の中にとびこみました。ぱっと水しぶきがあがりました。
ところが、姫のからだは、ふしぎにも水の中に沈まないのです。それは、頭にかぶったあの大きな鉢が、水の上に浮かびあがってしまうからです。姫は、顔を水の上へ出して、川下のほうへ流されていきました。
ちょうど川岸に、ひとりの漁師が、釣りをしていました。漁師は、
「おやおや、大きな鉢が流れてきたぞ。」
といいながら、その鉢をつかんでひきあげました。見ると、鉢の下から人間の娘があらわれたので、漁師はびっくりして、姫を岸の上にほうりあげてしまいました。
しばらくして、気のついた鉢かずき姫は、
「川の底に沈んでしまえばよいものを、なんで浮かびあがってしまったのでしょう。」
と、悲しい身の上をつくづく考えながら、ぼんやりとそこにすわっておりましたが、こうしてばかりもおられませんので、また、あてもなく足にまかせて歩きだしたのです。
しばらく行くうちに、ある村に出ました。

村の人たちは、姫を見ると、
「頭が鉢で、からだが人間のお化けがやってきたぞ。」
「山奥から出てきた、鉢のお化けかもしれないぞ。」
と、気味悪そうに、口ぐちにののしりました。すると、また、ひとりがいいました。
「おい、あの手足を見てみろ。お化けにしては、きれいな手足をしているぜ。」
「なるほど、美人のお化けっていうわけか。」
まわりに立っていた人たちは、どっと笑うのでした。

✲嫁くらべ

姫　ところで、この国を治めている国司で、山陰三位中将という人がありました。
き　ある日、中将は、何人かの家来をつれて散歩に出かけました。緑にそまった野山の景色、夕がすみ
ず　のかかった村里の美しい景色などを、おもしろく眺めておりますと、そこへ鉢かずき姫が、とぼとぼ
か　と通りかかりました。「おやっ。」と思った中将は、家来に、
鉢　「あの者を、こちらへつれてまいれ。」

といって呼びよせて、たずねました。
「おまえは何者で、どこからきたのだ。」
「はい、わたくしは交野の近くに住んでいた者でございます。母親に死にわかれて、嘆き悲しんでおりますうちに、頭の上にこんな鉢をのせたかたわになってしまいました。今では、だれひとり気味悪がって、ことばをかけてくれる者もございません。しかたなく、あてもなしに、さまよい歩いてまいりました。」
中将は、家来たちに、
「なんとかして、その鉢を頭からとりのけよ。」
と、命じました。家来たちが、さっそく力を合わせて、引っぱってみましたが、どんなに力を入れても、とれませんでした。中将は、
「とれぬものならしかたがない。そのうえ、行くあてもないというのはかわいそうだ。わたしの家へくるがよい。こういう変わりものの娘がひとりぐらいいるのも、おもしろかろう。」
といって、鉢かずき姫をつれて帰りました。お屋敷へつくと、中将は、
「おまえは、どんな仕事ができるのか？」
と、たずねました。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo